

過疎・被災の ムラ若返る 若者が次々移住

十日町の池谷・入山集落

過疎高齢化に2004年の中越地震が追い打ちをかけ、一時は「ムラをたたむしかない」とささやかれた十日町市の池谷・入山集落に、今、20、30代の都会の若者が次々と移住したり、その準備をしたりしている。「農業をしたい」「記録映像を撮りたい」。動機は様々だが、ボランティアによる支援活動がきっかけとなった。26日、被災から6年間支援してきたNPOが、若返る集落の「自立式」を東京都内で開いた。

(服部誠一)

「支援もういらぬ」 東京のNPO 「自立式」開催

池谷・入山集落は標高約3000メートルの山間部にある。昭和30年代は、両集落で約50世帯250人が農林業で暮らしていた。入山から市郊外に転居後も支援にかかわる会社員山本浩史さん(59)は「栗拾いをしたりアケビの木まで競走したり、山の遊びは楽しかった」と懐かしむ。だが林業は衰退し、入山では1989年に最後の1世帯が離村。池谷でも5世帯12人まで減り、70

歳前後のお年寄りばかりが残った。そこへ中越地震が襲う。海外の被災地などで活動するNPO「JEN(ジェン)」（東京都新宿区）などが支援に乗りだし、廃校校舎を拠点に、6年間で延べ1千人以上のボランティアが、雪ほりや農作業を手伝った。

集落の素朴さに触れるにつれ、定住生活を望むボランティアが増えてきた。大阪市出



「自立式」で記念撮影に納まる池谷・入山集落の新旧住民。集落のロゴマーク入りの旗も贈られた＝東京都渋谷区西原2丁目

身の多田朋孔さん(32)は、東京の企業コンサルティング会社を辞め、今年2月に妻(32)、長男(3)と池谷集落に移住した。「海外の倒産が日本の景気を揺さぶるようなおかしな世の中。自給自足の確かな技術を身につけたい」。コマ作りを手伝い、自前の野菜を栽培する。

「何十年と続く集落の生き方を映像に残したい」と話す立教大学4年の坂下可奈子さん(23)は、内定を得ていた都内の映像制作会社を辞退した。来春、池谷集落の住民と

なる。都内の求人広告会社で働く女性(24)は「都会と田舎の橋渡し役をしたい」。親が納得したときに退社し、集落で暮らすつもりだ。

集落人口は来春までに8世帯17人となり、平均年齢もぐっと若返る。旧住民も活気づく。専業農家の曾根武さん(74)は「以前の集落の話題は病院や薬ばかりだったが、若い人と一緒にもうひとがんばりたい」。地元特産米の販売は軌道にのり、5年前に山本さんたちが作ったボランティアの受け皿組織

は、NPO化を目指している。

もはやJEN主導の支援はいらなくなつたと、開かれた

自立式。「過疎克服のモデルケースに」と、関係者は一様に期待した。集落存続の課題はなお多いが、出席した関口

芳史市長は「都会から移りこんでくる若者たちを、経済的に支える仕組みを作りたい」と明言した。